

當麻寺西塔発見の舍利容器について

当館学芸部長 内藤 栄

修理中の當麻寺（奈良県葛城市）の西塔（図1）から、昨年七月、金・銀・金銅の三重の舍利容器をはじめ、舍利莊嚴具（舍利を飾る品や奉納品）が発見された。発見された場所は、心柱の頂上、ちようど水煙の中心部に当たる位置であった。奈良国立博物館は修理を担当した奈良県教育委員会より調査を依頼され、このうちの金・銀・金銅の舍利容器を飛鳥時代後期（白鳳期、七世紀後半〜八世紀初頭）と推定した。当初発見された品々は全て塔に戻される予定であったが、舍利容器は白鳳期にさかのぼる貴重な作品であるため、舍利容器の複製品を作成し舍利を納めて塔に戻すこととし、舍利容器の原品は奈良国立博物館に寄託して、広く一般に公開されることになった。なお、舍利容器以外の品は多くが後世の追納品であるため、塔に戻されることになった。



図1 西塔

三重の容器のうち、舍利を直接納めるのが金製舍利容器（高一・二センチ、図2）である。金の鍛造製で、身はやや下ぶくれの球形を見せ、薄い円筒形の蓋をのせている。その形は、崇福寺址（滋賀県大津市）の塔心礎から発見された舍利容器（国宝、近江神宮所蔵）の金蓋碧瑠璃壺ときわめて近い。崇福寺は六六八年に建立された寺院で、塔の建立もその頃と思われる。金製舍利容器も同時期の作と考えて良いと思われる。



図2 金製舍利容器（當麻寺西塔発見）

金製舍利容器は、銀製舍利容器（高三・一センチ、図3）内に安置されていた。これは銀の鍛造製で、球形の身に薄い円筒形の蓋をのせる。蓋にはそろばん玉形のつまみがつく。これと近似した形の作品に、葛城市加守出土の金銅骨蔵器（重要文化財、東京国立博物館所蔵）がある。出土地は二上山東麓であり、當麻寺からも近い。埋葬された人物は不明だが、西塔の舍利容器と何らかのつながりを感じる。なお、火葬は白鳳末に始まつており、金銅骨蔵器もその頃に置くことが可能であろう。



図3 銀製舍利容器（當麻寺西塔発見）

一番外側の容器が金銅製舍利容器（高九・〇六センチ、図4）である。やや押しつぶしたような球形で、鑄造後にろくろで形を整え、金メッキを施している。径の一番大きなところを合口としており、蓋の上部には容器の蓋をイメージした円形の段がある。銀製舍利容器を入れるには大きく、おそらく様々な奉納品もあわせてこの中に納められたのであろう。



図4 金銅製舍利容器（當麻寺西塔発見）

當麻寺が現在の地に建立されたのは、六八一年と伝えられる。実際、當麻寺は金堂の弥勒仏坐像、四天王像、梵鐘など白鳳期の作品を伝えている。當麻寺の歴史を考えれば、白鳳期にさかのぼる舍利容器が伝わっていても不思議ではない。問題は西塔の建立が平安時代前期と考えられる点である。西塔が建つ場所からは白鳳瓦が発見されており、以前よりここに前身塔が存在したという説があったが、あらためてこの説が見直されよう。

白鳳期には数多くの塔が建立され、舍利が納められた。しかし、今日この時期の舍利容器の作例はきわめて少ない。當麻寺西塔の舍利容器は金・銀・銅の三重が揃い、しかも土中しなかったため状態がきわめて良好である。古代仏教美術史に新たなページを飾る作品である。

◆舍利容器（図2〜4）は、西新館名品展「珠玉の仏教美術」にて、2月19日から3月14日に展示。